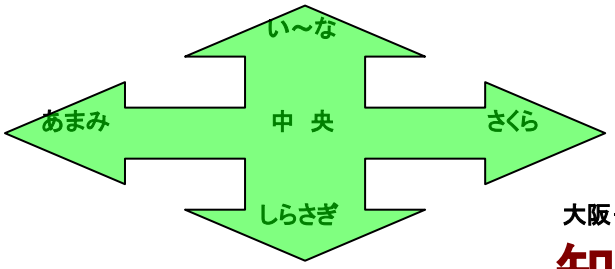

大阪＋知的障害＋地域＋おもろい＝創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 1622 号 2013.11.6 発行

==========

小規模の障害者施設、スプリンクラー設置義務付けへ　　共同通信　2013 年 11 月 6 日

総務省消防庁は５日、障害者施設でこれまで対象外だった小規模施設にもスプリンクラーの設置を義務付ける方針を決めた。消防庁は今後、関係法令の改正などを急ぐ。

障害程度の重い入所者向けのグループホームや支援施設、乳児院などは現在、延べ床面積 275 平方メートル以上でスプリンクラーの設置義務がある。

長崎市で２月に起きた認知症グループホームの火災を受け、消防庁は全ての高齢者向け福祉施設をスプリンクラー設置義務の対象とする方向で検討。障害者施設でも同様に、設置義務を小規模施設に拡大する必要があると判断した。

ただし、避難に介助が必要な利用者が少ない施設や火災時に避難しやすい構造の施設などは設置を免除する方向。

５日に開かれた障害者施設の火災対策検討部会では、利用者が避難に介助が必要かを客観的に判断する方法などをめぐって出席者から意見が相次いだ。次回会合で、対策をめぐる報告書をとりまとめる予定。

グループホーム建築規制緩和 県方針２階建て以下、寄宿舎適用免除

読売新聞　2013 年 11 月 6 日

障害者を対象にした介助・援助付きの住居サービス「グループホーム」に関し、県は、既存の戸建て住宅を活用しやすくするために建築基準法に基づく規制を緩和する方針を固めた。愛知県の人口当たりのサービス利用者数は全国的にも少なく、規制緩和によって整備を促進したい考えだ。（志磨力）

県によると、グループホームの利用者数は人口１０万人当たり２８・５人と全国平均（５６・６人）を大幅に下回り、埼玉県に続いて全国ワースト２位。県は２０１４年度の定員数を１０年度末の２２６６人から２倍の４５３２人とする目標を定めているが、受け入れ施設の不足が課題となっている。

これまで戸建て住宅を活用する場合、建築基準法で「寄宿舎」の扱いとなることが同法に基づく申し合わせで決まっていた。このため、防火用間仕切り壁の設置や敷地内の通路幅の確保などが必要で、大規模改修によるコストが施設整備が進まない一因となっていた。

県は今年５月から、福祉や建築、消防分野の専門家らによる有識者会議で問題を協議。その結果、地上２階以下、延べ面積２００平方メートル未満の建物に関し、「寄宿舎」の適用規定を免除する案をまとめた。

具体的には、間仕切り壁の設置が必要なくなるほか、通路の幅（１・５メートル以上）やバルコニーの手すりの高さ（１・１メートル以上）などの適用を除外した。工事費は一戸あたり約２００万円から約２０万円に削減されるという。一方で、年３回以上の避難訓練を実施するなどソフト面での安全確保策を充実させるよう求めることにしている。

県によると同法の規制緩和は福島、鳥取両県に続いて３例目。大村秀章知事は「既存の戸建て住宅の活用需要はある。安全対策を徹底しながら、障害のある方々の住まいを確保

していきたい」と語った。

「障害者乗馬」をＰＲ＝自民・野田氏

時事通信　2013 年 11 月 5 日

国会議事堂前で、受け取った障害者乗馬啓発のための要望書を手に馬に乗る自民党の野田聖子総務会長＝５日午後、東京・永田町

自民党の野田聖子総務会長は５日、乗馬で障害者の症状を改善させる運動の啓発のため、国会正門前で乗馬に挑戦した。野田氏の長男も障害を抱える。馬上で活動への支援を求める要望書を受け取った後、野田氏は記者団に「こういう機会を通じ（障害者が）どんどん新しいことにチャレンジできる国をつくりたい」と語った。

企画した「ＮＰＯ青い風牧場　馬とふれあう会」によると、障害者乗馬は馬の揺れによって自然と体幹が強化されたり、馬に触れることで精神面での症状が緩和されたりする効果があるという。

大阪提案の「公設民営学校」、下村文科相がエール　国家戦略特区法案が閣議決定

産經新聞　2013 年 11 月 5 日

地域を限定して規制緩和を認める国家戦略特区法案に大阪府・大阪市が提案していた公設民営学校の検討が盛り込まれたことをについて、下村博文文部科学相は５日の閣議後会見で「対象自治体は積極的な提案をしてほしい」とエールを送った。

公設民営学校については与党内でも慎重論が根強いが、下村文科相は「既存の公立学校で十分に対応できない不登校や発達障害の子供たち、スポーツ、芸術に特化した教育を受けたい子供たちに対応できる学校をイメージしており、党内でも了承が得られた」と説明した。

大阪府・大阪市は、中高一貫校や国際バカロレア認定を受ける公設民営学校の設置を国に提案している。ただ、運営主体など具体案はこれからで、文科省は大阪府・大阪市から詳細な提案を受けた後、西川京子副大臣を中心に必要な施策を検討する。

触れ合い夢応援　養護施設の子どもたちＵＳＪ招待　大阪日日新聞　2013 年 11 月 5 日

大人と児童養護施設で生活する子どもたちとの交流を図る任意団体「関西・子ども・夢チャリティー」（大阪市中央区）は 17 日、関西の施設で生活する子どもたちを大阪市此花区のテーマパーク「ユニバーサル・スタジオ・ジャパン（ＵＳＪ）」へ招待する。２００５年の立ち上げ以来、これまで約７００人の子どもたちと、延べほぼ同数の大人が企画に携わっており、「大人と触れ合いながら夢を語る」をテーマに社会貢献を果たしている。

参加するのは２～18 歳の子どもたち。18 歳になると施設を“卒業”することが義務付けられていることから、自立した生活を送っていくための社会性を幼少からサポートしていきたいという狙いがある。東京ディズニーランド（千葉県浦安市）をステージにした、類似の取り組みが創設のモデルにもなっている。

昨年のイベントの様子（関西・子ども・夢チャリティー提供）

子どもたちは、応募した一般の参加者、“大人サンタ”らとともにグループ別で行動し、園内で終日アトラクションなどを楽しむ。また、ウオークラリー方式で夢を“書く”“みんなに話す”“みんなで応援する”という３要素で成る「夢を叶(かな)えるワーク」を予定しており、後日にはそれを受けて、大人たちが施設を訪問して交流する場も設ける。

「子どもの夢を応援したい」という企画のコンセプトを話すのは、同団体代表の大橋昭仁さん（36)。“大人サンタ”たちに対しても「一緒に関心を深めるきっかけになり、社会貢献を果たすことでやりがいや生きがいを感じられる機会になれば」と期待を込めている。

同団体では、当日子どもたちと遊ぶ“大人サンタ”を募集している。参加費は１万３千円（参加者本人、子ども１人分の入園料、食事代など)、年間スタジオ・パスを所有する場合は８千円。締め切りは 10 日。

申し込み、問い合わせは、同団体ホームページ（http：／／yume－charity．com）内の専用フォームまたは電子メール info2@yume－charity．com、同団体へ。

また、活動に協賛する個人や企業、団体を募集している。１口千円。申し込みは、ゆうちょ銀行１４１８０－０３９９４５２１「関西・子ども・夢チャリティー」、他行から申し込む場合は、ゆうちょ銀行四一八支店、店番号４１８・普通０３９９４５２「カンサイ　コドモ　ユメチャリティー」へ。

障害者のアートをカレンダーに　ＢＡＣ仙台が作成

朝日新聞　2013 年 11 月 6 日

6 月のカレンダー。牛の表情はすべて異なる

【日野克美】障害者の作品を広く知ってもらおうと、ボーダレスアートクラブＢＡＣ仙台（河本達子会長）は「２０１４年ボーダレスアートカレンダー」を作った。

宮城、岩手両県の福祉施設に通う１２人の絵や貼り絵、陶芸といった作品が使われている。今回から壁掛け（１５００円）のほかに、ポストカードとしても使える卓上版（千円）も制作した。仙台市青葉区のギャラリーくろすろーど（０２２・２６５・１４８７）で販売している。

介護・医療 の仕事知って

朝日新聞　2013 年 11 月 5 日　群馬

寸劇で介護の仕事の魅力を訴える学生たち＝県庁

県内では全人口に占める６５歳以上の高齢化率が２０２５年に３１・３％となり、１０年より７・７ポイントも増えるとされる。介護や医療への需要は高まるが、人材は不足している。仕事の魅力を伝え現状を変えようと、学生ら若者が奮闘している。

「認知症予防の体操です。ご一緒に」。４日に県庁であった「介護の日」（１１日）にちなむ仕事ＰＲイベント。群馬社会福祉専門学校介護福祉専攻科の学生約４５人が、１カ月かけて考えた寸劇を披露した。

介護福祉士を養成する課程がある大学や専門学校など、９校の学生でつくる実行委員会と県が主催。実行委は６月から６回、授業後に県庁に集まって企画を話し合ってきた。

寸劇の他、専用器具での高齢者・障害者疑似体験や介護で役立つ点字・手話など各校の企画は様々。委員長で群馬医療福祉大短期大学部２年の茂木智瑛（もて・き・ち・え）さん（１９）＝安中市＝は「介護の本当の姿を知ってもらおうと、みんなで考えた」。

茂木さんは小学４年の時、祖母の介護方法を母に分かりやすく教えるホームヘルパーを見て介護職を志した。「だけど、周囲からは『大変なのに』『えらいね』と言われる。悪い印象を変えたい」と話す。

介護職について県は１４年度に０８年度比１・４１倍の２万８５００人必要との計画を掲げるが、人手不足の施設は多いという。介護高齢課は「『３Ｋ』と言われたイメージが回復しきれていない」とみる。県ではイベントのほか、小学５年、中学１年、高校１年の児

童・生徒に介護の仕事を紹介する冊子を配るなどして印象向上につとめている。(小林誠一)

自閉症の女性作家が個展　越前和紙の染め作品など

福井新聞　2013年11月5日

岩野市兵衛さん（左）の越前和紙を使った和紙染め作品「輪紋　ＩＮＩＳＩＥ」を掲げる大久保友記乃さん＝１０月３日、越前市大滝

独特の色彩感覚で国内外から高い評価を受ける自閉症のアーティスト大久保友記乃（ゆきの）さん（２４）＝北海道旭川市＝が１１月９日から福井県内３会場で個展を開く。人間国宝の岩野市兵衛さん（８０）＝越前市＝がすいた奉書紙を使った和紙染め作品などを出品する。制作のアシスタントも務める母、昌子さん（５２）は「子どもたちはきっと何かを持っている。同じような立場の親御さんの励みになれば」と話している。

友記乃さんは3歳の時に言語の発達の遅れや多動から重度の自閉症と診断された。昌子さんは娘が小学2年の時にテレビゲームで色遊びをする様子をみて「この子の色使いは独特かもしれない」と気付いたという。

絵画造形教室に通い、色を重ねた後にひっかく技法のスクラッチや和紙染めなどを経験。小学5年生の宿泊研修では七宝焼に出会った。２００６年には、中学１年の時に描いたスクラッチ作品「モネに見える？」が、カナダのモントリオール国際芸術祭で世界芸術賞を受賞した。以降も国内外の展覧会に出品し、賞も獲得している。

今回の個展「友記乃の不思議な世界」(福井新聞社後援）は、昌子さんの知人の南出直美さん（６４）＝坂井市＝が企画。展示に先立ち、１０月には大久保さん親子らが奉書紙を提供してくれた岩野さんの自宅を訪れ、出品する和紙染め作品を披露した。岩野さんはその時の印象について「出来上がりが頭に描けているのだろうか、天才的だと思った。見に行くのを楽しみにしている」と話す。

和紙染めや七宝焼、スクラッチ、油彩など２４点を出品する。作品の展示数は会場により異なり、一部は販売する。９、１０日にあわら市の金津創作の森、１２～１４日に福井市のアオッサ、１６、１７日に坂井市のいねすで開く。入場は無料。

昌子さんは自身と同様、障害のある子どもの親を含め、幅広い層に訪れてほしいと話す。「娘は最近、創作活動を自分の仕事としてみているようだ。子どもはきっと何かを持っている。親御さんにはその部分を伸ばしてあげてほしい」とメッセージを寄せている。

あらゆる人に優しい目を　ラジオで福祉トーク

読売新聞　2013年11月6日

これからの福祉のあり方について、ゲストの小山田さん（右）と語るアサダさん（上京区で）

障害者の活動を支える美術家や音楽家らが文化的な視点で「福祉」について語る異色のラジオ番組「Ｇｌｏｗ（グロウ)」が、地元のラジオ局で放送されている。司会を務めるミュージシャンのアサダワタルさん（３４）は「あらゆる人に優しいまなざしを向ける福祉の考え方を広げたい」と語る。(今岡竜弥)

番組は「日本の障害者福祉の父」といわれ、戦後の混乱期に孤児や知的障害者のための施設を創設した糸賀一雄（１９１４～６８年）の生誕１００年を迎えるのを前に、福祉施設や障害者の家族会などでつくる記念事業実行委が企画。

番組名は、障害の有無に関わらず、誰もが快適に過ごせる社会の実現を願って輝きや幸福感を意味する英語からとり、１０月から放送を始めた。これまで障害者の音楽祭を企画

し、活動を促してきたフォーク歌手の小室等さんらが出演している。
　番組では障害者福祉のほか、「苦しみを抱えるあらゆる人に目を向けよう」と、災害被災者らもテーマに上る。１日には、２０１２年８月から東日本大震災の被災地・宮城県女川町で、住民が「迎え火」をたくプロジェクトを進める京都市立芸術大准教授の小山田徹さん（５２）がゲスト出演。「仮設住宅に入ると会話が少なくなり、コミュニケーションが途切れてしまう」と心配する被災者の声を紹介し、「迎え火の風習がない地域で年に一度、人々が集まって震災の話ができる場として根付かせたい」と、地域の絆を再生するプロジェクトの狙いを語った。
　番組では今後、引きこもりや貧困で苦しむ人々を支える場所作りに取り組む詩人・上田假奈代さん、アルツハイマー病の母親との生活を撮影した映画監督・関口祐加さんらが登場し、司会のアサダさんと福祉支援のあり方などを語る予定。放送はＫＢＳ京都ラジオで、毎週金曜午後９時～９時２０分。

難病の息子、マラソン支えたい　宝塚の母がＮＰＯ設立

神戸新聞　2013 年 11 月 5 日

宝塚ハーフマラソンに挑戦する林聖憲さん（左から２人目）と母優子さん（左）＝２０１２年１２月、宝塚市内

　兵庫県宝塚市の林聖憲（きよのり）さん（１９）はマラソンが大好きだ。だが、重度の知的障害と乳児重症ミオクロニーてんかん（ＳＭＥ）で骨の変形が進み、３０歳になると車いす生活になるかもしれない。「あと１０年。素敵な思い出をもっと」と、母親の優子さん（５４）が中心になり、障害者のマラソン大会参加を支援するＮＰＯ法人「ぽっかぽかランナーズ」を立ち上げた。「障害者、支援者、沿道の観客。みんながぽっかぽかな気持ちになるように」との願いを込める。（木村信行）
　ＳＭＥは４万人に１人とされる難病。木漏れ日やしま模様を見ただけでてんかんの発作が起きることがある。
　幼少の頃は偏見と発作が怖くて閉じこもりがちだったが、優子さんは「地域に育ててもらおう」と考え直した。小中学校では運動会で徒競走に出場。転んだら同級生が駆け寄ってくれた。
　特別支援学校高等部１年生のとき、校内のマラソンに初挑戦。１・５キロの部でいきなり優勝した。タイムは１１分０８秒。手を引いた先生の息は上がっていたが、聖憲さんは余裕の表情だった。
　「きよ君、もっと速く走れるよ」。先生が励ましてくれた。陸上部に入ろうか。だが、入部の条件は「生活面の自立」。着替えや身の回りの支度が一人ではできず、伴走者が必要な聖憲さんは諦めるしかなかった。
　２年前。優子さんはＳＭＥの親の会で、重症患者は３０歳前後で車いす生活になるケースが多いと聞かされた。聖憲さんも骨の変形が進み、以前より歩くのが困難になった。
　リハビリを兼ね、昨年秋から六つの市民マラソンに参加した。突然、座り込むこともあるが、「もっと早く」と伴走者の手を引っ張ることもある。沿道の声援に励まされ、１・５～３キロの部を完走。言葉は「うーうー」や「あー」だけど、挑戦することの喜びと達成感を体で表現した。
　優子さんは障害者の参加の少なさを痛感し、「挑戦したいのは聖憲だけじゃない。もっと多くの仲間と走りたい」と１０月、「ぽっかぽかランナーズ」を立ち上げた。毎月１回、同市の武庫川河川敷で練習を予定しており、障害者ランナーや伴走ランナー、ボランティアを募る。詳しくは同ＮＰＯホームページ。林優子さんＴＥＬ０７９７・８５・８８４６

サンアクアＴＯＴＯ:障害者の作業紹介　４９人を雇用　企業など、工場見学　／福岡

毎日新聞　2013 年 11 月 05 日

障害者を数多く雇用しているＴＯＴＯグループのサンアクアＴＯＴＯ（小倉南区）が、雇用や生産現場の様子を紹介する「工場開放の日」を開いた。障害者の雇用を検討中の企業や障害者支援学校関係者ら約１２０人が訪問した。

サンアクアは１９９３年２月、ＴＯＴＯと県、北九州市の出資で設立され今年で２０周年。従業員８４人のうち過半数の４９人が肢体不自由や知的などの障害者。シャワーや蛇口などの水栓金具組み立てなどの仕事をしている。

工場見学では、視覚障害者のために設置されたチャイム連動のライト、車椅子でも手を伸ばしやすいよう低く設置された部品棚などを紹介。製造部で働く山路三千代さん（４２）は聴覚障害があるが、手話で、日々の生活や仕事に触れながら「笑顔には嫌なことや不安なことを忘れさせる力がある」と語った。

ＴＯＴＯグループの障害者雇用率は２・１６％（３月現在）で、２０１７年度までに２・５％への引き上げを目指している。【石田宗久】

【知恵の経営】障害者の幸せ願う職場環境　SANKEIBIZ　2013 年 11 月 6 日

法政大学大学院政策創造研究科教授　アタックスグループ顧問・坂本光司

北九州市の南小倉区に「サンアクアＴＯＴＯ株式会社」という社名の企業がある。主製品は社名でお分かりのように、トイレ用品で著名な「ＴＯＴＯ」の水洗金具や給排水金具の組み立てや、商品取扱説明書の作成・施工データ作成などである。

設立は１９９３年、ＴＯＴＯと福岡県、そして北九州市が出資し、いわゆる第三セクターとしてスタートしている。出資比率はＴＯＴＯが６０％、県と市がそれぞれ２０％ずつである。

第三セクターと言うと、行政主体・行政依存のイメージが強いが、同社の実態は一般的な三セクとは大いに異なる。それは設立目的が「就労したくても働く場がない障害のある人たちの受け皿」会社だからである。

福岡県や北九州市から、たっての要請があり、その役割をＴＯＴＯが引き受けてくれたのである。

◆多様性と職種に驚き

現在、同社には８４人の社員が在籍しているが、そのうちの４９人が障害者である。比率でいえば、約６０％と、わが国平均の１．７％をはるかに上回っている。

より驚かされるのは、働く障害者の多様性や、その職種である。４９人の社員の障害は「肢体不自由」が２５人、「知的障害」が８人、「聴覚機能障害」が８人、「精神障害」が４人、「内部疾患」が３人、そして「視覚障害」が１人といった具合である。

また、その職種は「組み立て作業」が３７人、「パソコンやＣＡＤ（コンピューター利用設計システム）を利活用し、図面や説明書を作成する作業」が９人、そして「総務・広報の作業」が３人である。

筆者はこれまで優に１００社を超す「障害者雇用先進企業」を見てきたが、これほど多様な障害のある人々が、これほど多様な職種で就労している企業は珍しい。

先日、北九州市で講演があった折、同社を訪問させていただいた。美しい外観の本社工場、これまた美しいまるでホテルのような、社内には正直驚かされた。

当日は同社の西村和芳社長が玄関まで迎えに出ていただき、事務所や本社工場の隅から隅まで案内していただいたが、いちばん筆者の心を満たしたのは、そこで働く障害者の自信に満ち満ちた仕事ぶりと笑顔であった。

◆屋根付きアプローチ

それもそのはず、仕事は障害者一人一人の個性に合わせていることはもとより、その職場環境は、真に障害者の幸せを願っていると感じる場面ばかりであった。

例えば、工場の周辺には、車いすの人に合わせた高さの、花壇や野菜畑・果物畑があり、その収穫は社員皆の楽しみという。

また、障害者用の駐車場は、本社工場に隣接しているばかりか、本社工場に入るアプローチは全て屋根付きで、障害者が傘をささなくても工場に入ってくることができるように配慮している。ちなみに西村社長ら健常者の駐車場には屋根がなかったばかりか、工場からはかなり離れた場所にあった。

西村社長はＴＯＴＯから派遣されたサラリーマン社長であるが、その才と徳はお見事である。

福島から七飯に移住、上條さん再出発　町内に通所施設開設

北海道新聞　2013 年 11 月 05 日

七飯町本町に完成した「ななえあーす」と上條大輔さん

【七飯】福島第１原発事故により、福島県南相馬市で運営していた障害児通所支援施設の休止を余儀なくされた上條大輔さん（４３）が町本町に建設していた通所施設「ななえあーす」が完成し、１０日からサービスを始める。七飯に移住してきた上條さんは「福島の子と同じように、道南の子供たちにも接したい」と張り切っている。

「ななえあーす」は、木造平屋で医務室などを完備。月曜日を除く日中、発達障害などを抱える未就学児から高校生までの子供たちを預かり、職員５人が交代で買い物など日常生活に必要なことを身に付けてもらい、自立を支援する。

七飯では当面、１日に１０人の子供を受け入れる。隣接する木造２階建ての民家を購入し、保護者が休憩できる仮眠スペースも設けた。

上條さんが南相馬で運営していた施設には、約５０人の子供たちが通っていたが、原発事故のため２０１１年６月に休止に追い込まれた。その後、福島の子供たちと訪れた七飯町の豊かな自然に魅せられ、七飯での再出発を決意。独立行政法人福祉医療機構（東京）からの融資も決まり、今年７月から施設を建設していた。

宮城県に避難している妻と長女はそのままだが、上條さんは「福島の施設再開のめども早く立てたい」と話し、近い将来、福島と七飯の子供たちが交流できるようにすることが夢という。問い合わせは、ななえあーす（電）０１３８・８４・５５４８へ。（鈴木孝典）

リスの恩返し

読売新聞　2013 年 11 月 6 日

町田リス園（町田市金井町）が、台風２６号で大きな被害を受けた伊豆大島を支援しようと、園内に募金箱を設置して来園者から義援金を募っている。

現在、同園で放し飼いにされている約２００匹のタイワンリスは、１９８８年の開園時に大島町元町の私営・旧「リス村」（現・伊豆大島椿花ガーデン）から購入した約４００匹の子孫たち。開園に当たって、リス村からは、様々な指導や協力を受けており、募金には「恩返し」の意味が込められている。

リス園は市制施行３０周年記念事業として市が設立し、障害者を雇用するＮＰＯ法人が運営している。リスを手に乗せたりエサをやったりしてふれ合えることから、多摩地区一円の子供たちに人気で、昨年は約１２万人が訪れた。

大島のタイワンリスは、昭和初期から野生化して大繁殖しており、リス村は、これを捕獲して、観光用に放し飼いにしていた。リス園開園時、町田市は、ここからリスを購入するとともに、協力を要請。リス村関係者が、飼育法を教えたり、放し飼い用の特殊なフェンスを無償で提供したりして、軌道に乗るまで運営を手助けした。

リス園には、当時、リス村から協力を受けた職員が残っており、今回の台風被害に接し

て、募金が提案された。募金箱は１０月２３日に、園内の広場に置かれ、「リスたちのふるさと伊豆大島の災害義援金を集めています」「ぼくらのご先祖は、昭和１０年に、伊豆大島に連れてこられた５０匹のリスたちです」という札が立てられている。

園で働く知的障害者のつながりで、募金の動きは町田市内の複数の福祉施設にも拡大している。今月いっぱい行われた後、代表者が、リス園分も含め、集まった義援金をまとめて大島町役場に持参するという。

町田リス園の入江繁子園長は「大島と交流してきたリス園にとって、被害は人ごとと思えない。わずかでも役に立てば」と話し、リス園の開園に協力した伊豆大島椿花ガーデンの山下隆史園長は「幸い、うちの園に被害はなかったが、リスつながりで支援していただき、同じ大島の住民としてありがたい」と話している。

不起訴の理由、児相に説明なし…和歌山・虐待死　　読売新聞　2013 年 11 月 5 日

和歌山市で起きた男児虐待死事件では、児童相談所（児相）は父親の虐待を疑いつつ、保護していた男児（長男）を家に戻した。２年前、長男への二つの傷害容疑がいずれも不起訴（起訴猶予）になった父親について、その理由は和歌山地検から伝えられておらず、児相関係者は「（父親らに）『潔白』と受け止められ、故意の虐待との認識を持たせられなくなった」と明かす。それでも、面会などを重ねて最終的に帰宅を決めた児相、そして捜査機関が「危険性を認識できた」との事実は消えない。事件を防ぐことはできなかったのか。

「（死亡という）結果なので判断が甘かったと言われれば致し方ないが、（帰宅させた判断が）間違いと言われるとすれば残念だ」

父親が傷害致死容疑で逮捕された先月２３日、和歌山県子ども・女性・障害者相談センター（児相）の巽清隆所長は記者会見で、結果責任の重大さを認めつつ、家族関係の修復を図った対応への苦悩をにじませた。

父親は２０１１年１１～１２月、長男の右の太ももを踏んで骨折させたり、顔に肩を打ち付けたりして負傷させたとして逮捕、再逮捕されたが、地検はいずれも起訴猶予とした。

起訴猶予は「罪を犯した事実は認定できるが、起訴するほどの悪質性がない」などの場合の処分で、同じ不起訴でも証拠が足りない嫌疑不十分などとは異なる。傷害容疑は、児相が県警に通報したもので、児相関係者によると、捜査機関から処分結果の連絡はあったが、理由説明はなかったという。

●男児の死亡を巡る経緯

2011年7月	頭部出血などで入院、病院から児童相談所に通告
10月11日	右太ももを骨折し入院、病院から児相に通告
13日	児相が虐待の疑いがあると和歌山県警に通報
11月16日	県警が父親を傷害容疑で逮捕、児相が一時保護
12月7日	県警が父親を傷害容疑で再逮捕
28日	和歌山地検が2事件とも不起訴（起訴猶予）
12年2月	乳児院への入所措置、父親と面会開始
7月	外出開始
8月	自宅への外泊開始
13年7月8日	児相が入所措置を解除、自宅に戻る
24日	くも膜下出血で死亡
10月23日	県警が父親を傷害致死容疑で逮捕

児童虐待問題の専門機関「子どもの虹情報研修センター」（横浜市）の川崎二三彦研究部長は「虐待の容疑での逮捕者が、起訴猶予とはいえ不起訴になると、その者を含む保護者側は無罪と受け止め、虐待の改善を求める児相の立場は弱くなる。不起訴理由を詳しく知ることができない児相は、疑問を抱えたままの対応を迫られるのが現状」と話す。

大阪市で児童相談所長を務めた津崎哲郎・花園大特任教授（児童福祉論）は、「骨折や父親が否認していることを考慮すれば、他の事案よりリスクが高いと認識できたはずで、家庭復帰はより慎重にすべきだった」とする一方、「福祉の理念として、子供を家庭に戻すには幼いうちがよく、外泊などを何度も重ねて判断した点は、一概に責められない面もある」としている。父親は逮捕後、一貫して容疑を否認している。

和歌山市の男児虐待死事件　和歌山市の会社員原和輝容疑者（２６）は７月、自宅で長男の星涼（せり）ちゃん（２）の頭に複数回暴行し、死なせたとされる。児相は昨年２月から星涼ちゃんを乳児院に入所させていたが、面会や外出、外泊を計６５回重ね、事件の約２週間前に自宅に戻した。